２０１４年９月２３日
教区聖餐式　説教
「聖霊よ、われらを新たに」
司祭　上田亜樹子
立教女学院チャプレン

今日のテーマは、式文の表紙にもあるように、「聖霊よ、われらを新たに」です。突然ですがこの言葉は、皆さんの中で、今どのように響いているでしょうか。もっとはっきり言うと、「聖霊よ、われらを新たに・・・」このあとに、どういう言葉が続きますでしょうか。ふつうに考えたら「われらを新たに～してください（ますか?）」かもしれません。あるいはもう少し違った調子で、「われらを新たにしてくださらないと、本当に困ります」ということかもしれません。しかし、もし、「私は現状維持以外、何もするつもりはないけれど、聖霊が何かやってくれるなら、新たにされてもいいです」という気持ちがあったとしたら、居心地良く、私の期待したとおりに、ラクチンに、聖霊が新たにしてくれるなら受け入れましょう・・・という気持ちだとしたら、それは「神さまに対する信頼」とは少し違うことのように思うのです。

わたしたちは本当に、「聖霊よ、われらを新たにしてください」と叫び求めたいのでしょうか。そう叫び求める準備が出来ているのでしょうか。叫ぶ求める心の準備は出来ていないけれど、叫び求めて神さまにナントカしていただくしか、他に道はないと、本当にハラをくくっているのでしょうか。あるいは、何もしたくないけれど、とりあえず叫んでおこうと思っているのでしょうか。

少し話はかわりますが、私自身のことを少しお話ししたいと思います。振り返ってみると、私の信仰生活には３つのステップがあったように思うのです。

ステップ１：子ども時代

両親が教会に行っていたので、生まれる前から教会に行っていた、いわゆるボーン・クリスチャンでした。幼児洗礼を受け、小学校高学年から礼拝でオルガンを弾き始め、クリスマスの礼拝では日課を読み、そんな教会生活を送っていました。でも私の心の中には、誰にも話していないひとつの決心がありました。

「礼拝は問題ないが、こんなつまらない人たちと付き合って、自分の時間を無駄にしたくはない。大人になって自活したら、教会とはおさらばしよう」子どもだった私の目には、教会の人が「偽善者」に見えたからです。

「神さまはすべての人を分け隔てなく愛されている、喜びや悲しみを分かち合おう、お互いに支え合おう、貧しい人、抑圧されている人に仕えよう」牧師さんの説教ではそのように語られますが、大人たちがそれを実行しているようには見えませんでした。近くに競輪競馬場があったので、日曜日はものすごい人出がありましたが、その人々に教会は門を閉ざしているように見えました。家族中で教会に通っている私のような子どもに対しては、ちやほやしようとしますが、ひとりで来ている子どもには態度が違いました。陰ではこそこそお互いのワルグチを言い、足をひっぱりあい、弱い立場の人は黙り、声の大きな人が幅をきかせる、いわゆる世間一般と、何のちがいもない教会での人間関係を感じていました。

子どもである私に対して何をしてくれたか、ではなく、クリスチャンである大人たちがどのように人生を生きているのか、自分の課題と向き合っているのかいないのか、子どもの私はシッカリ見ていて、この人たちのような大人にはなりたくない、そのためには教会にいてはアブナイ、と思った次第です。

ステップ２：「クリスチャン＝国籍論」時代

「教会には居られない」と思っていた私ですが、ある時に見方が変わりました。「教会は確かに居心地がわるい。しかし、いろんな人がいるのは構わないのだから、私が逃げ出すのではなく、自分もここに居てよいのではないか。自分も居られるように、変えようとしてもよいのではないか」　そう考えるようになりました。「クリスチャン」となったことは自分で選んだのではなく、たまたま「日本国籍をもつことになった」日本人ということと同じなのではないか、と思うようになりました。つまり、日本に生まれて日本国籍を持つ自分は、直接関与していなくても、日本人がこれまで犯してきた罪や様々な歴史を負って生きるしかない、あまり好きではないけれど、日本人とうまくやるしかない、ということと似ている、

と考えたからです。

「私がクリスチャンになることを選んだのではなく、ご縁があってたまたまそうなった」「クリスチャンとして生きることを神さまがお命じになったのなら、呼ばれた場で、できることをやるしかない」

一見、謙遜風な物言いに聞こえますが、私の場合は、特段の喜びも感謝もそこにはなく、「信徒というお仕事」を、押し付けられた雑務をこなすように、仕方なくやるしかない、と思っていたところがありました。そこには生かされている喜びも、時間が与えられた感謝も、今、自分に預けられている様々な恵みも一切無視して、まるで自分は自分のチカラで生きているような、そんな態度だったと思います。

ステップ３：格闘の時代そして今も

やがて、「クリスチャン＝国籍論」にも破綻がやってきました。嫌になったら別の国籍に変わるように、自分の責任において教会を離れればよいのに、何故自分はまだここに居るのだろうかと問うようになったからです。離れないのは、何かどうしても、教会でなければ得られない何かがある、ということは感じているが、それについて知らなくてよいのだろうか、放置してよいのかと。もし、教会でなければ得られないものがあるのだとしたら、それをはっきりと知らなくてもよいのかと自問自答しました。

「自由選択によるクリスチャン」になれなかったからと言って、クリスチャンであることの責任、役割、また、教会を通じて分かち合われる永遠のいのち、福音のメッセージ、喜び、感謝を見つけ出すことを、むざむざ怠けていてよいのだろうかと。仕方がないからクリスチャンをやっている、今更やめられないから、これからもとりあえず惰性でクリスチャンとして生きていく、というのは、あまりにも受け身で無責任な生き方ではないかと。

今頃そんなことを反省しているなんて、司祭である上田が、そんなことを言うなんて、とおっしゃる方もおられることでしょう。しかし私自身は、今も未だこのステップ３あたりをうろうろし、しばしば見失い、わからなくなり、何も感じられなくなったりしながら、それでもクリスチャンとして生きる喜びと感謝を日々見つけなくちゃ、と毎日格闘している次第です。

怒濤のような日常生活で、日々のこなすべき仕事は消化していても、一見、日毎の礼拝も授業も会議もソツなくこなしていても、一番見失ってしまいやすいけれど、決して見失ってはならないことのひとつは、私たちがクリスチャンとして生きる特別な喜び、恵み、感謝なのではないかと思うのです。

しかしそれは、何があっても“有り難や～”と一からげに受け留め、全ては感謝だと、口に出しておけばよい、ということではありません。「喜びです」「感謝です」と言いながら、心が堅く閉ざされている人は、見ればスグわかります。そして、クリスチャンとはこのようなダブルスタンダード人生を生きることなのだと、世に示すことになってしまいます。

もし、喜びも感謝も感じていない自分をさて置き、外側だけ奇麗に整えて振る舞おうとする人が、どんどん増えてしまったとき、そしてそれをよしとしてそのままにしておくとき、教会は何の魅力もなくなり、礼拝の意義も感じられず、何のために日曜日毎に集まり散っていくのか、わからなくなるのではないでしょうか。そんなときは、「聖霊よ、われらを新たに」してください、と叫ぶことすら出来なくなってしまうのではないでしょうか。

でも、わたしたちが自分のチカラでナントカ出来なくなっても、ひとりでは何ともならなくても、そこから突破口を見出す方法があります。それが「礼拝」です。

わたしたちの「なすべき礼拝」について、今日の使徒書もこう語っています。

「心を新たにして自分を変えていただき、

何が神の御心であるか（を知り）

何が善いことで神に喜ばれ、完全であるか」（をわかるようになること）

教会に行ってもツマラナイと感じる時、神さまに変えていただく必要があるのは、暗い顔をしたアッシャーでも、ドゲトゲしてしまったお食事当番でも、挨拶ができないベテラン教役者でもなく、まず自分自身を変えていただくよう礼拝で願い求める。すると、神さまが何を計画されているか、神さまにとっての正しいこと善い事が何であるのかわかり、おのずと自分はどうすればよいのか見えてくる。これが真剣に礼

拝に出席したわたしたちひとりひとりが受ける「恵み」なのだと思います。

そしてまだ、使徒書は続きます。「自分を過大に評価してはなりません」これは、常に「自分は何もできません」と、縮こまっていなさいという意味ではありません。自分を過大評価する人は、状況がかわると、今度は自分を「過小評価」します。神さまに創られたそのままの姿ではなく、自分勝手に、自分自身を膨らませたり、矮小化したりします。その方が安心で簡単だからであり、ありのままの自分とは直面しないでも前に進めるから、見たくない現実を回避できるからです。そのことへの「なりません」というメッセージです。

「慎み深く評価すべきです」も同様で、自身の心とカラダを歪めてでもやってしまおうと、人の期待に自分を合わせて満足しようとするのではなく、神さまに創られたままの尊い自分に尊敬の念をはらい、自分に出来る限りのことに力を尽くした後は、一切を思い切りよく神さまにおまかせする、そんな決断をすすめています。

私たちが日曜日ごとに礼拝をするとき、心は何処に向いているでしょうか。「あ～この聖歌が終わったら、うどんのだしを」なのか（それも大事かもしれませんが）、それとも、他の機会では取り戻すことのできない一発勝負の瞬間でもある礼拝に、真剣に神さまに願い求め、叫び求めている心を持ってしているでしょうか。

わたしたちが豊かな礼拝によって、心を新たにされ、自分を取り戻し、向き合うべき課題が見えてきたとき、福音書にあるように、イエス様から「愛しますか」と繰り返し呼びかけられ、そして「わたしに従いなさい」と、直接にお招きされていることを実感するでしょう。礼拝によって、わたしたちのうちに、喜びと感謝が取り戻されたとき、その喜びと感謝をどのように、私たちが用いるのか、問われます。「あ～、心がほっとして喜びで満たされてよかった、ヨカッタ。これで満足！」で、終わりにしておきたい時もあるでしょう。しかし、わたしたちがクリスチャンになったという意味は、そこで終わっていては駄目なのだということでもあります。イエス様を「愛すること」は、イエス様の生き方に共鳴し、その生き方にならって生きていくように、自分なりの最大限努力をやめない、たとえ不安や恐れがあっても、神さまが何をしてほしいと思っておられるのか聴こうとする、そういう生き方を選択している人がクリスチャンなのだと思います。

ここで２つの例を申し上げたいと思います。

まず牧師の役割についてです。牧師は、クリスチャンとしての自分と、聖職者としての自分との、両方の側面があると思いますが、「檀家の面倒をみる」ごとく、自立したくない方の面倒をみることが最優先のお仕事とは私は思いません。牧師が、プロの教役者であるように、信徒はプロのクリスチャンですから、信徒が自分のやるべきことを一生懸命考えるのは、信徒自身それぞれの責任です。時にはなかなか考えられないときや、一生懸命考えても実現しないときもありますが、最初からの丸投げは、プロとしてとるべき態度ではなく、丸投げばかりしていてはいけないと、信徒の自立を促す役割もあるでしょう。そういう意味で、一番大切な仕事は、「プロの信徒」が、教会の中から外に向けて、神さまの言葉を述べ伝えやすいように、自身の生き方をもってイエス様を世の人々に示しやすいように、マネージメントをすることではないかと思います。そのためには、教会がどこに向かうのか、ヴィジョンや目標の設定、あるいは信徒のための教育プログラムを考え、そこに乗り切れないプロの信徒がいる場合は、その対策を考え、必要とあれば他にも助けを求める、それが「イエスさまを愛すること」であり、「イエスさまに従う」牧師のひとつの在り方ではないかと思うのです。

２つ目の例は、青少年による青少年のための宣教についてです。「青少年たちが教会にいない／極端に少ない」のは危機的状況だということについて議論の余地はないと思いますが、教会が危機だから組織維持のために「青少年が必要」と考えるのは、本末転倒です。青少年が来たいと思わないような人々の集まりに、その組織維持のために青少年を「つかう」というのは論外だからです。こういうことを言うと、「いや、自分の若いときは、なんでも手伝ったし」「役にたって嬉しかった」など、それが何故今は通用しないのかと感じる方もおられるでしょう。「机運びなど、

としよりばかりでは辛い」という現実の問題もあるかもしれません。
でも、机運びもお手伝いも「自分で選んで」参加する場合と、自分たちを「利用しようとして近づいてこられる」場合とでは雲泥の差があることを、そのように処遇される側はとても敏感にそれを感じとるものだ、ということを、覚えておきたいと思います。

この度、東京教区に青年会が復活し、来月２６日に最初の集まりをします。青年達が集うことによって、それが青年達の励ましとなり、居場所となり、やがて学びや奉仕を共に体験することも予定の中にあるでしょうが、一番の目的は、宣教の最前線という器となることです。まだ福音に触れていない人に良い知らせを伝え、生きる喜びを知らせ、感謝をもって生きることがどんなに豊かな人生か、身をもって示す。その結果として、教会組織の維持へと繋がることもあるかもしれませんが、それが目的であってはなりません。

青少年の世代に福音を伝えるのは、青少年でなければできない部分があります。教区の青年たちが自主的に始めたこの活動は、まさに「イエスさまを愛すること」「イエスさまに従う」生き方に他なりません。

わたしたちの教会が、教区が、これからどうやって生き残るのか、精一杯の賭けをするのか、あるいはしないのか、何を大事にするのか、何を思い切って手放すのか、覚悟を決める時が来ていると思います。こういう話をすると、不安ばかり突きつけられる、気持ちが暗くなるばっかりだと言われるかもしれません。

しかし、溜息しか出てこない現実を直視しなければ、事実から逃げられるというわけではありません。これ以上何かを失うことを恐れ、後生大事に残骸にしがみついていないか、検証する必要もあるでしょう。辛いですが、このような作業から、「意気消沈」以外の何の言葉も出てこないのであれば、果たして真の信仰共同体が今も存在しているのかどうか疑問です。わたしたちが失ってはならないのは、目に見える財産ではありません。

これから私たちはどう生きていくのか、その選択はひとりひとりの私たちの手にゆだねられている、そのことこそがわたしたちの真の財産です。

まわりを見回し、他の人の顔色を見て、事を荒立てるよりは、なりゆきを見守ろう、その方が身を守れる、そのような贅沢を言っている時間は、あまり残されていないと思います。「私を愛するか」と聞いてくださる神さま、「わたしに従いなさい」と招いておられるイエス様の声の前で、もう一度、「聖霊よ、われらを新たに」の後に、どんな言葉が皆さんの心にやってくるか、想い起こしてみてください。

そして、私たち自身が「聖霊によって新たにしていただく」ために、

①まず本気で「礼拝」に参加したいと思っているかどうか自分に聞いてみること

②「自分が静かにお祈りできれば他の事はどうでもいい」のが礼拝の目的ではなく、他の人が変わったらよいと思う前に、まず自分を変えていただくよう祈ること

③わたしたちが、今日という日を生かされている喜びを分かち合い、伝える責任を忘れないこと

④喜びを失くし、自分の気持ちをごまかしながら頑張っていることに気がついたら、自分ひとりだけで何とかしようとせず、プロの信徒として、プロの教役者として、神さまに委ね、外にたすけを探し求めること

⑤神さま以外のもの（＝不安、欲望、メンツ、プライド、権力、流行）には従わない決意を新たにすること

「わたしに従いなさい」とは、私たちの予想や想像できる範囲を越える世界へと招かれることです。そして、私たちの期待とは異なる世界へ連れていっていただくことです。それは、皆が賛成するとは限らない道でありますが、そこに主体的に導かれていくことです。

そして、「わたしに従いなさい」というお招きは、「私は必ず最後まであなたと共にいます」という約束に他なりません。わたしたちは身ひとつで、この約束だけを頼りに、やるべきことと向き合う道を、最後までご一緒に歩き通そうではありませんか。

父と子と聖霊のみ名によって

アーメン